

— 檜原村の信仰 — (12)

(記 岡本)

低山歩きをしていると、1000m以下の山道端や集落に石仏、石塔、石碑等(以下信仰物と記す)村人の信仰に関わるものに出会う。我知らずカメラを向けてしまう。見た目が同じようなものでも、作られた時代、作った人、経てきた時代の差異によってそれぞれの個性の差が認められて、性懲りも無く撮り続けてきた。

～風雪に 面無くした 石仏に 知らず識らずに 我こうべ垂れ～

村の信仰物は江戸時代のものが多い。その種類の多さには驚愕させられる。例えば、板碑(いたび)、馬頭観音、観音菩薩、地藏菩薩、道祖神、庚申塔、三界万霊供養塔、寒念仏塔、二十三夜塔(月待塔)、百番塔、聖徳太子塔、猿田彦神像、富士嶽塔、水神塔、山の神、百万遍塔、千部塔、脱衣婆像、金精様、弁財天等等である。

病気や自然災害への対策が思うようにならず、あらゆる面で過酷な営みを強いられた往時の人々は神仏に依存することが多く神頼みは必要条件だった。五穀豊穡(豊年満作)、家内安全、悪病払い(無病息災)、氏子繁栄、極楽往生などを祈った。文明人だと自負する現代人にさえパワースポット巡りが流行っていることを思えば、数百年の昔に多くの信仰物を頼りにした精神は容易に理解できる。

村の信仰物は豊かな個人や同業者仲間や講中(信仰の儀式参拝などをする仲間組織)によって建てられた。江戸時代の檜原村は、二十三組に分かれており、本宿に3組、南谷(南秋川流域)に10組、北谷(北秋川流域)に10組あって、各組に組頭(年寄)と百姓代が各1名置かれ、それを名主1名が代官の指示の元に統括して村の行政が行われていた。各組に五人組帳や宗門改め帳があって、組毎の一体感が養われていた。各組は神社仏閣を競って創建した。詳細な地図を見ると寺や神社の多いのに気づくはずである。村人は講中を組織して、名主や寺院から「通行手形」を出してもらい、各地の神社仏閣を娯楽を兼ねて参拝した。村には通行手形の古文書として、130人が団体に伊勢神宮に参拝した時の手形(檜原村名主から箱根関所の御役人衆中様宛て)や神戸(かのと)の徳永寺が出した「国々所々御役人衆中様宛て」の手形(「途上で死んでも遺体などは届けてもらう要なく、埋めて貰えばよい」とも書かれている)などが残っている。手形を読むと江戸時代の旅が水盃を交わす程の命懸けのものであったことが窺われる。

信仰物で特に興味深いものについて略記する。



板碑(青石塔婆)=東京近郊の低山を歩き始めて板碑を初めて知ることになった。板碑は関東、東北地方と四国の阿波地方の限られた地域にのみ存在するという。板碑は、細長い板状の石に釈迦如来、阿弥陀如来、大日如来などを梵字で刻み、その下に戒名、没年、故人の事績・讃辞が刻まれた、死者の追福供養の石の卒塔婆である。村内には120基程が見つかっている。

素材は秩父山系から出る青石(緑泥片岩)である。主に故人の追福供養のために遺族が建てるのが建前だが、「逆修」といって生前に建てることもあった。板碑が流行したのは鎌倉時代から室町時代頃までで、この時代の金石文として重要な史料である。村内の板碑は、鎌倉末期頃から室町の戦国時代が始まる頃のものが多い。

最初の頃は歴とした武士が立てたが、常民の有力者や素封家も真似をしましてブームになった。その風潮を不快に思った幕府が禁令を出したのか、江戸時代に突然姿を消した。南北朝時代の板碑の年号には北朝名が使われており、関東一円が北朝に傾斜していたことがわかる。村で一番多く発見されている所は人里(へんぼり)、次いで南郷地区である。当時の村内で両地域が豊かだった証であろうか。

馬頭観音=村内で最も多く、160基を超える。村の生業に必需の牛馬が遭難死した場所に追善供養塔として建て、又道の難所に建てて人馬の安全を祈ったものである(会のホームページの随想欄「馬頭観音」をご参照)。

地藏菩薩=六道と言われる地獄道、飢餓道、畜生道、修羅道、人間道、天上道に迷う衆生を救済する仏で、病気治療や延命・子育てなどの祈願のためにも祈った。

庚申塔=江戸時代の民間信仰で60日に一度回ってくる庚申(かのえさる)の日に講中が集まって寝ずの夜明かしをした。寝てしまうと体中の三尸(さんし)という虫がその人の罰を天の神に知らせ寿命を縮めるという。



二十三夜塔(月待塔)=月齢二十三夜の日(阿彌陀如来が右に智の勢至菩薩、左に慈悲の観世音菩薩を伴って現れ、拜むと諸願成就、幸福になれるとして女性が信仰した。この日の夜、念仏を唱え飲食を共にして楽しんだ。闇夜を恐れた時代に、下弦の二十三夜の月の出は、0時から午前1時頃で深更を照らしてくれるのでありがたかった。新嘗祭とも関連があると言われる。

百番塔=観世音菩薩を安置した三十三ヶ所の霊場を巡礼すると功德が得られるという。坂東(関東)の三十三ヶ所、秩父の三十三ヶ所(三十四ヶ所)、西国の三十三ヶ所の全国百の霊場を巡拝した場合と同じ功德が百番塔を祀ると得られると信仰されていた。

多摩地方の信仰風土は、山間部に入ると臨濟宗が多く、次いで真言宗が多く、曹洞宗、天台宗は少ないという。又日蓮宗、浄土宗、浄土真宗は八王子、立川などの都市部に多いが、山間部に入ると殆どみかけないという。村で一番の寺格の寺は、檜原城址の麓にある吉祥寺(臨濟宗建長寺派)で応安6年(北朝年号、1373年)の建立である。本尊は釈迦坐像で、平山氏の廟でもある。村最古の寺は、北谷の小沢にある宝蔵寺(真言宗)で承元元年(1207年)の建立で、五日市にある大悲願寺の末寺である。村には無住を含め24寺ある。その内19寺が吉祥寺の末寺で他の5寺が大悲願寺の末寺である。住職在住の3寺の住職が無住の寺院を兼務している。



神社は村内に15社ある。大岳山に鎮座する大岳神社(旧郷社)は、天平の世に橘高安が安閑天皇の霊を勧請して開いたものとされる。安閑天皇、大国主命、日本武尊等12柱が本殿に祀られている。白倉バス停の北に続く尾根の道が登拝路で950m程の高低差がある。

最後に、都の無形民俗文化財に指定されている七芸能を列記する。春日神社(旧村社)の直会(なおらい)である御どう神事(どうは、食に同の漢字)。能系統として笹野式三番、小沢式三番。神楽系統として柏木野神代神楽、数馬太神楽。獅子舞として藤倉獅子舞、数馬獅子舞。

(了)

参考資料

「郷土史檜原村」、「檜原紀聞」

「山の神さま・仏さま」太田昭彦著 ヤマケイ新書(2016年刊)